

研究拠点形成事業 平成25年度 実施計画書

A. 先端拠点形成型

1. 拠点機関

日本側拠点機関:	北海道大学アイヌ・先住民研究センター
(カナダ)拠点機関:	アルバータ大学
(連合王国)拠点機関:	アバディーン大学

2. 研究交流課題名

(和文): 北方圏における人類生態史総合研究拠点
(交流分野: 考古学、人類学、生物学、環境科学)

(英文): Advanced Core Research Center for History of Human Ecology in the North
(交流分野: Archaeology, Anthropology, Biology, Environmental Science)

研究交流課題に係るホームページ: <http://www.hucc.hokudai.ac.jp/~20623/north/>

3. 採用期間

平成25年4月1日 ~ 平成30年3月31日
(1年度目)

4. 実施体制

日本側実施組織

拠点機関: 北海道大学アイヌ・先住民研究センター

実施組織代表者 (所属部局・職・氏名): アイヌ・先住民研究センター・センター長・
常本照樹

コーディネーター (所属部局・職・氏名): アイヌ・先住民研究センター・教授・
加藤博文

協力機関: 琉球大学大学院医学研究科、東京大学総合研究博物館

事務組織: 北海道大学国際本部国際連携課、文学部事務部

相手国側実施組織 (拠点機関名・協力機関名は、和英併記願います。)

(1) 国名: カナダ

拠点機関: (英文) University of Alberta

(和文) アルバータ大学
コーディネーター (所属部局・職・氏名) : (英文) Department of Anthropology, Professor,
Andrzej WEBER
協力機関 : (英文) なし
(和文) なし
経費負担区分 (A 型) : パターン 2

(2) 国名 : 連合王国

拠点機関 : (英文) University of Aberdeen
(和文) アバディーン大学
コーディネーター (所属部局・職・氏名) : (英文) Department of Archaeology, Professor,
Keith DOBNEY
協力機関 : (英文) Centre for Asian Archaeology, Art and Culture, School of
Archaeology, University of Oxford.
(和文) オックスフォード大学東アジア考古学・芸術・文化オックスフォードセ
ンター
経費負担区分 (A 型) : パターン 1

5. 全期間を通じた研究交流目標

人類は、生理学的に熱帯型の生物であるにも関わらず、既に4万年前には北緯70度の北極圏にまで到達した。その動きは解剖学的現代人の出現と拡散の動きと連動する。250万年間のホモ属の人類史において農耕出現以降の歴史は、わずか1万間に過ぎず、その大半は狩猟採集民の歴史であった。狩猟採集民社会の人類史の解明は、すなわち我々現代人の進化的位置付けを解明することになる。しかし、従来人類史は中緯度の国家史・文明史中心の叙述であり、狩猟採集社会は、その初源的生活様式としての位置付けにあまんじてきた。

北海道大学を中心とした研究チームでは、2011年からアルバータ大学、アバディーン大学などとの間で北方圏に展開する狩猟採集民社会の環境適応行動の特性とその独自の歴史的変遷過程を解明する目的で考古学、古環境学、分子生物学、人類学などの領域横断型のプロジェクトを組織、スタートさせた。本事業では、北方圏の狩猟採集民の人類史の中でも、北海道島周辺の変動する自然環境とその中で営まれた人類環境史の独自性と多様性を解明していく。本研究の中核には北海道をフィールドとした複数国の研究者、若手研究者が参加する国際フィールドスクールを企画実施し、中核的研究拠点の役割を果たす3大学の施設を活用し、単独の大学機関ではカバーできない研究手法や研修制度を国際共同として実施していく。特に1) 国際フィールドスクールでは、異領域の研究手法の統合と研修機会の提供、研究者交流の場を提供する。2) 国際セミナーにおいては、最先端の調査研

究手法と研究機材の使用方法の習得の機会を提供する。3) これら国際共同研究を通じて、若手研究者の研究機関を超えた指導体制、共同研究の枠組みを構築する。

6. 前年度までの研究交流活動による目標達成状況

平成25年度から開始

7. 平成25年度研究交流目標

○「研究協力体制の構築」

これまで蓄積してきた個別参加メンバーの国際交流（加藤—Weber—Dobney、加藤-Gosden、加藤-Price、石田-Lieverse、佐藤-Losey、増田-Losey、米田—Shulding、米延-Ramsey など）を共通の課題である「北方圏における人類文化・環境適応・景観創造」にむけて統合するためのリエゾンとしての研究拠点を北海道大学内に構築する組織作りを開始する。また海外拠点へ参画メンバーを派遣して国際セミナーを開催し、共同研究の中核となる理論的課題と枠組みの構築のための機会形成をおこなう。各研究教育機関が共通して保有する課題である研究フィールドと一次資料の共有と利用のための制度設計をすすめる。

研究拠点間の協力体制をプロジェクト内のみではなく、より組織的な体制とするためにアバディーン大学とは、大学間交流協定の締結めざす。またオックスフォード大学東アジア考古学・芸術・文化センターとは部局間交流協定を締結し、安定した組織間での人的交流の促進を図るための体制づくりを進める。

○「学術的観点」

ヨーロッパ、北米、アジアにおいて個別に地域研究が展開されてきた学史的経緯を有する北方圏における人類史を、北半球規模のグローバルな視点に立った気候環境変動や環境と人類の相互作用を射程に入れた総合的研究の枠組みの確立を目指した共同研究に着手する。また地球規模の比較研究が標準化している環境科学領域において蓄積されたデータと、局地的な地域集団の系統性や環境適応行動との相関性を検証するために安定同位体分析や生活誌解析、古代遺伝子解析などの手法を用いて集団の食性と生活習慣が地域集団の地域性を検討する。さらに北方圏の人類社会を中緯度圏の都市文明史と対比し、その独自の人類史的意義と特徴を検討するために a) 生活資源の家畜化、b) 海洋適応、c) 集団移動と拡散、d) 景観創造の観点からの国際的比較研究を展開する準備をおこなう。

国際学会において本事業の研究計画や方向性を発信するためのセッションを積極的に立ち上げ、国際的に本事業の活動内容の発信に取り組む。

○「若手研究者育成」

事業メンバーに大学院生、ポスドクを積極的に参画させ、海外拠点とも連携した若手研

研究者育成の機会を創出する。具体的には a) 海外拠点への派遣や国際セミナーでの報告を通じた複数の研究拠点に所属する研究者の協力による複数指導体制の構築、b) 国際フィールドスクールを利用した野外での最新の調査機材の活用講習も含めた指導機会の創出、c) 院生やポスドクによる海外拠点の視察とチュートリアルを通じた最先端の研究動向と将来的な留学、研修機会の提供、d) アバディーン大学とオックスフォード大学においては、共同連携講義を企画実施、e) 海外拠点も含めた院生やポスドクによる領域横断的なプロジェクト内の組織を形成し、独自に研究者（室）インタビューやニューズレターの作成など若手研究者の独自のネットワークを構築、以上の項目を展開する。

○ 「社会への貢献」

本事業が対象とする歴史文化遺産や景観は、近年、地域社会を巻き込んだ公共性の観点重視した保存活用の取り組みが国際的にも求められている。本事業においては、最も多くの研究者がフィールドとして共有する礼文島における国際フィールドスクールを核として平成25年度は、地元自治体、教育委員会、高校、北海道アイヌ協会などの先住民組織とも連携して地域住民対象の参加型プログラムや参加する海外研究者による公開講演会やワークショップを実施展開する。また本活動項目については、メンバー内にパブリック考古学（Public Archaeology）の具体的展開を実施するメンバー組織を構築し、地域社会と密に連携し、研究成果の地域社会や高等教育への還元を積極的に実施する。

8. 平成25年度研究交流計画状況

8-1 共同研究

—研究課題ごとに作成してください。—

整理番号	R-1	研究開始年度	平成25年度	研究終了年度	平成29年度
研究課題名	(和文) 北方圏における人類文化・環境適応・景観創造 (英文) Human Culture, Adaptation, modified Landscape in the North				
日本側代表者 氏名・所属・ 職	(和文) 加藤博文・北海道大学アイヌ・先住民研究センター・教授 (英文) KATO Hirofumi, Center for Ainu & Indigenous Studies, Professor				
相手国側代表者 氏名・所属・ 職	(英文) Andrzej WEBER, Department of Anthropology University of Alberta, Professor				
参加者数	日本側参加者数	27名			
	(カナダ)側参加者数	24名			
	(連合王国)側参加者数	52名			

25年度の 研究交流活動 計画	カナダと連合王国の研究者の参画を得て、北方圏の人類社会を中緯度圏の都市文明史と対比し、その独自の人類史的意義と特徴を検討するための共同研究を開始する。事業初年度である25年度は、1) 気候環境変動サイクルや高精度年代学などの議論のための枠組みに関する研究、2) 具体的な数値データを蓄積し、比較検討する安定同位体分析や生活誌解析、古代遺伝子解析に関する研究、3) 北方圏の人類文化の鍵となる研究項目である生活資源の家畜化・海洋適応・集団移動と拡散・景観創造の諸項目を検討する理論考古学・人類学の共同研究を開始する。
25年度の 研究交流活動 から得られる ことが期待さ れる成果	すでに欧州、北米、北アジアにおいて共通した研究課題が存在し、広域の比較検討をする段階にあることは海外拠点の研究リーダーとの協議の中で共通理解に達している。25年度の研究交流活動においては、これまで領域単位で蓄積されてきた研究成果と課題を整理し、関連領域の研究者との間で共有する機会を作り出すことが期待できる。なによりこれまで総合的に検討されてこなかった北米からアジアを經由し北欧にいたる北半球を横断する人類史的課題の議論がスタートすること、さらに深淵な研究課題の発見、次年度以降の具体的なセミナーの課題の相互共有と研究ネットワークの拡大の基盤形成となることが期待される。

整理番号	R-2	研究開始年度	平成25年度	研究終了年度	平成29年度
研究課題名	(和文) 北方人類史研究における先住民文化資源の過去と未来 (英文) Past and Future on Indigenous Cultural Properties for Human History in the North.				
日本側代表者 氏名・所属・ 職	(和文) 加藤博文・北海道大学アイヌ・先住民研究センター・教授 (英文) KATO Hirofumi, Center for Ainu & Indigenous Studies, Professor				
相手国側代表 者 氏名・所属・ 職	(英文) Chris, GOSDEN, School of Archaeology, University of Oxford, Professor				
参加者数	日本側参加者数	27名			
	(カナダ) 側参加者数	24名			
	(連合王国) 側参加者数	52名			

<p>25年度の 研究交流活動 計画</p>	<p>北方圏の人類史資料は、長年にわたり「典型的な」民族資料として欧米の主要な博物館研究施設に蓄積されてきた。これら歴史的なコレクションの収集経緯、コレクション特性を比較考察することから北方圏の人類史が文明史の視座からどのように評価利用されてきたのかについて批判的に検証していく。またその特性を相対化し、評価することから新たな人類史の枠組みを構築する上でどのように活用していくことができるのかについて既存の学問領域にとらわれない視座からの議論を通じての共同研究の取り組みを開始する。</p>
<p>25年度の 研究交流活動 から得られる ことが期待さ れる成果</p>	<p>周知のように20世紀までは西洋の視座からの文明史が提示され、またその一方向的な見方の見直しが問われた時代であった。一方で長年フィールド対象であったアジアにおいては、欧米で置きつつある従来型の視座からの脱却と研究視座の再構築の必要性が希薄なままである。また研究成果の発信の言語的制約からの偏りは未解決のままである（英語による研究成果の発信）。北米、アジア、ヨーロッパの研究者が一同に介して課題を議論することから初年度の成果としては、脱植地的な議論のために必要な条件と構築すべき体制が明らかにされること、次年度以降の具体的かつ発展的な課題点提示されることが期待できる。</p>

8-2 セミナー

整理番号	S-1
セミナー名	(和文) 日本学術振興会研究拠点形成事業「礼文島人類生態史国際フィールドスクール」
	(英文) JSPS Core-to-Core Program “Seminar on History of Human Ecosystem in Rebun Island “
開催期間	平成 25 年 7 月 20 日 ～ 平成 25 年 8 月 21 日 (30 日間)
開催地 (国名、都市名、会場名)	(和文) 日本国、礼文町、浜中遺跡群
	(英文) Hamanaka sites, Rebun, Hokkaido, JAPAN
日本側開催責任者 氏名・所属・職	(和文) 加藤博文・北海道大学アイヌ・先住民研究センター・教授
	(英文) KATO Hirofumi, Center for Ainu & Indigenous Studies, Hokkaido University, Professor
相手国側開催責任者 氏名・所属・職 (※日本以外での開催の場合)	(英文) Andrzej WEBER, Department of Anthropology, University of Alberta, Professor

参加者数

派遣先 派遣	セミナー開催国 (日本)	
	A.	B.
日本 〈人／人日〉	10 / 300	13
カナダ 〈人／人日〉	7 / 210	20
連合王国 〈人／人日〉	3 / 90	0
合計 〈人／人日〉	20 / 600	33

- A. 本事業参加者 (参加研究者リストの研究者等)
 B. 一般参加者 (参加研究者リスト以外の研究者等)

<p>セミナー開催の目的</p>	<p>本セミナーの目的は、1) 貴重な歴史文化遺産である考古遺跡は、単に歴史的物質文化資料を内包するものではなく、過去の環境情報や人類と動植物など生態系との相互作用が累積し、形成されたものであることを実践的に学ぶ機会を提供すると、2) 良好に保存された遺跡データを高精度に収集し、また遺跡情報を包括的に記録する野外調査技術を開発することにある。具体的には、カナダと連合王国、そして日本を主体とする多領域のチームメンバー研究者と学生が参画し、それぞれの研究の核となる一次資料の収集方法と記録保存に関する最先端の手法について議論をおこなう。現段階では①考古学領域：GIS 搭載測量機材、3D スキャナによる電子測量法、地中探査レーダによる遺跡探査技術、貝層を含む多層位遺跡および埋葬地遺跡・石器製作址の空間分析方法、②人類学領域：遺伝子サンプル採取法、③古環境領域：地形形成調査法、ボーリングによる湖底堆積物調査法、同位体分析用の水質および植生調査法などを予定している。</p>		
<p>期待される成果</p>	<p>30名近い国内外の研究者や学生が共同で長期間にわたり調査研究に従事することで本事業の中核的課題である国や機関の単位を越えた研究組織の構築が促進されることが期待される。高精度の調査機器の操作技術や、それを応用した調査分析手法の習得を通じて、将来的な研究課題を発見し、さらに所属研究機関以外の研究者からの指導を受ける機会を得ることは、本事業に参画する次世代を担う若手研究者にとって重要な機会を提供することになる。また異なる領域の研究者が基礎データの収集状況に関する情報を共有する貴重な機会を提供することが可能となる。</p>		
<p>セミナーの運営組織</p>	<p>北海道大学の拠点メンバーを中心にフィールドスクールの実施運営組織をプロジェクト内に組織し、またフィールドマスターとRAによるフィールドスクールの支援体制を組織する。事業メンバー内では、加藤以外に、ハドソン、木山、岡田、深瀬がフィールドスクールの組織メンバーとなり、これに大学より事業推進に関してTAを貼付けるための経費支援を申請中である。次年度以降にはフィールドマスターとして専従できるスタッフを確保するべく大学側と調整し、体制の補強を図ることを検討している。</p>		
<p>開催経費 分担内容 と概算額</p>	<p>日本側</p>	<p>内容 国内旅費 備品・消耗品購入費 その他</p>	<p>金額 4,800,000 円 500,000 円 300,000 円 合計 5,600,000 円</p>

	(カナダ) 側	内容 外国旅費 国内旅費
	(連合王国) 側	内容 外国旅費 国内旅費

整理番号	S-2
セミナー名	(和文) 日本学術振興会研究拠点形成事業「安定同位体分析・年代測定国際セミナー」 (英文) JSPS Core-to-Core Program “Seminar on ISO and 14C dating“
開催期間	平成 25 年 7 月 1 日 ~ 平成 25 年 7 月 7 日 (7 日間)
開催地 (国名、都市名、会場名)	(和文) 連合王国、オックスフォード、オックスフォード大学 (英文) University of Oxford, Oxford, UK
日本側開催責任者 氏名・所属・職	(和文) 米田穰・東京大学総合研究博物館・教授 (英文) YONEDA Minoru, The University Museum, University of Tokyo, Professor
相手国側開催責任者 氏名・所属・職 (※日本以外での開催の場合)	(英文) Rick Shulting, University of Oxford, Lecture.

参加者数

派遣先 派遣		セミナー開催国 (連合王国)
日本 〈人／人日〉	A.	5/ 25
	B.	0
カナダ 〈人／人日〉	A.	2/ 10
	B.	0
連合王国 〈人／人日〉	A.	5/ 25
	B.	2
合計 〈人／人日〉	A.	12/ 60
	B.	2

- A. 本事業参加者（参加研究者リストの研究者等）
 B. 一般参加者（参加研究者リスト以外の研究者等）

セミナー開催の目的	北方圏の人類集団の文化的多様性が形成される背景を解明するためには、集団を取り巻く環境史の変遷を客観的に提示する必要がある。とりわけ気候環境変動の時代的サイクルと数値年代の高精度の推定は時間軸として極めて重要である。本セミナーにおいては、国際的な基準構築に関わる連合王国と日本の研究者を中心に気候環境変動の基準となる湖底堆積物からの気候環境変動の変遷の推定と高精度年代測定をめぐる最新の成果と課題を討議し、地域的変遷の比較検討を行うことを目的としている。
期待される成果	参画する研究者は、それぞれ国際的および地域的な年代的枠組みや気候環境変動の開析に従事する第一線の研究者である。蓄積されてきた地域的データを地球規模の観点から比較検討することで、北半球規模での地域的な文化的・集団的動態を客観的な時間枠の中で相対化し、その背景にある気候環境的動態との対比が可能となる。また国際的な研究をリードする研究機関での討議に参加する機会を若手研究者に与える事は、将来的な研究課題の設定や、研究ネットワークの構築に大きく寄与することが期待できる。

セミナーの運営組織	<p>本セミナーは、協力機関であるオックスフォード大学東アジア考古学・芸術・文化オックスフォードセンターと放射性炭素加速器ユニットのメンバーである Rick Shulting と Christopher Ramsey 中心となり準備する。日本側では米田穰と加藤博文が、カナダ側からは Michael Richard が調整にあたり参加者と課題点の整理をおこなう。セミナーの会場であるオックスフォード大学は、年代測定と考古分析化学をリードする世界的センターであり、セミナーの運営をする組織と施設を完備している。</p>		
開催経費 分担内容 と概算額	日本側	内容	外国旅費 金額 1,700,000 円 外国旅費に係る消費税 85,000 円 合計 1,785,000 円
	(カナダ) 側	内容	外国旅費
	(連合王国) 側	内容	国内旅費 セミナー開催経費

整理番号	S-3
セミナー名	(和文) 日本学術振興会研究拠点形成事業「ヒト・動物相関関係国際セミナー」
	(英文) JSPS Core-to-Core Program “Seminar on Animal-Human Interaction“
開催期間	平成 25 年 10 月 28 日 ～ 平成 25 年 10 月 30 日 (5 日間)
開催地 (国名、都市名、会場名)	(和文) 連合王国、アバディーン、アバディーン大学
	(英文) University of Aberdeen, Aberdeen, UK
日本側開催責任者 氏名・所属・職	(和文) 佐藤孝雄・慶応義塾大学文学部・教授
	(英文) SATO Takao, Faculty of Letters, University of Keio, Professor
相手国側開催責任者 氏名・所属・職 (※日本以外での開催の場合)	(英文) Keith DOBNEY, University of Aberdeen, Professor.

参加者数

派遣先 派遣元		セミナー開催国 (連合王国)
日本 〈人／人日〉	A.	7/ 35
	B.	0
カナダ 〈人／人日〉	A.	3/ 15
	B.	0
連合王国 〈人／人日〉	A.	34/ 170
	B.	0
合計 〈人／人日〉	A.	44/ 220
	B.	0

- A. 本事業参加者（参加研究者リストの研究者等）
 B. 一般参加者（参加研究者リスト以外の研究者等）

セミナー開催の目的	近年、改めて注目されつつある北方圏の狩猟採集民社会における動物と人間との相関関係について家畜化と儀礼の観点から国際的比較検討をおこなうセミナーである。北半球の各地では、これまでも民族誌的に人間と動物との相関性に関する特異性とこれを基盤として構築される独自の世界観の存在が指摘されてきた。本セミナーにおいては、家畜化の鍵となるイヌの家畜化と課程と歴史的背景および熊をめぐる儀礼に関する北半球の事例の比較検討をおこなう。
期待される成果	家畜化は、長らく狩猟採集社会ではなく農耕社会出現のメルクマールとされてきた。北半球で蓄積される家畜化の事例の国際的な事例集成と比較検討は、従来の北方圏の人類社会に対するイメージを一新し、人類史の枠組みに再検討を促す重要な要素である。地域的に蓄積されたデータを地球規模の視座から俯瞰することで現象の時空間的相対化が可能となり、方や地域的特性とその背景や要因について多角的に検討する機会が提供される。若手研究者の国際化の機会を提供することも期待できる。

セミナーの運営組織	<p>セミナーはアバディーン大学考古学部の全面的支援を受けて開催される（すでに開催については 2013 年 3 月中旬に加藤博文と Keith Dobeny, Neil Price とで協議済み）。Keith Dobney と Neil Price を中心に英国自然環境財団助成を受けて 2013 年 10 月からスタートするプロジェクトメンバーを中心としたチームで運営される。加藤博文は当該プロジェクトにメンバーとして参画しており、また佐藤孝雄はアジア地域の参加メンバーを統括する。またカナダ側の参加メンバーについては、Rob Losey が組織メンバーとして調整に参加する。</p>		
開催経費 分担内容 と概算額	日本側	内容	外国旅費 金額 2,500,000 円 外国旅費に係る消費税 125,000 円 合計 2,625,000 円
	(カナダ) 側	内容	外国旅費
	(連合王国) 側	内容	国内旅費 セミナー開催経費

整理番号	S-4
セミナー名	(和文) 日本学術振興会研究拠点形成事業「生物人類学国際セミナー」 (英文) JSPS Core-to-Core Program “Seminar on Bio-archaeology”
開催期間	平成 26 年 1 月 16 日 ~ 平成 26 年 1 月 19 日 (4 日間)
開催地 (国名、都市名、会場名)	(和文) 日本、札幌、北海道大学 (英文) Hokkaido University, Sapporo, Japan
日本側開催責任者 氏名・所属・職	(和文) 深瀬均・北海道大学医学研究科・特任講師 (英文) FUKASE, Hitoshi, Graduate School of Medicine, Lecture
相手国側開催責任者 氏名・所属・職 (※日本以外での開催の場合)	(英文)

参加者数

派遣先 派遣		セミナー開催国 (日本)
日本 〈人／人日〉	A.	8/ 32
	B.	0
カナダ 〈人／人日〉	A.	3/ 12
	B.	0
連合王国 〈人／人日〉	A.	2/ 8
	B.	0
合計 〈人／人日〉	A.	13/ 52
	B.	0

- A. 本事業参加者（参加研究者リストの研究者等）
 B. 一般参加者（参加研究者リスト以外の研究者等）

セミナー開催の目的	<p>先史時代の集団の生活痕跡を出土人類学資料から如何に読み取るのかについて最新の分析手法と研究成果を比較検討すること、また人類学資料のもつデータの活用と最先端の計測技術について若手研究者向けに事業参画メンバーが解説することがセミナーの目的である。先史時代の所産であつても人体に関わる資料の取り扱いには極めて慎重な配慮と倫理的な認識が必要であることを教授することは、当該領域の資料に数多く触れる機会がある人類学領域の若手研究者には極めて重要な機会である。</p>
期待される成果	<p>世界各地で活躍する欧米や日本の研究者から研究課題や最先端の分析手法の教授を受ける機会を提供する研究教育組織は数多くない。人体に蓄積された生活誌データには、過去の生活環境や生活様式、文化的行動に関するデータが含まれる。これらを正確に読み取り評価することは、文字史料を残さなかったために一方向的に「野蛮」「未開」と評価されてきた北方の人類集団の生活文化の特性を地域環境への適応行動として再評価することが期待される。自らの体内に人間集団と自然環境との相関性に関わる情報が内包されていることを認識する貴重な機会となる。</p>

セミナーの運営組織	<p>セミナーは、深瀬均を中心に北海道大学に所属する事業参画メンバーで準備する。セミナーには、北海道大学と本事業参画メンバーに限らず広く日本各地の研究機関に所属する研究者や日本人類学会会員などにも声をかけ、広く国際的な議論に参画する機会を提供する。</p>		
開催経費 分担内容 と概算額	日本側	内容 国内旅費 セミナー開催経費	金額 900,000 円 100,000 円 合計 1,000,000 円
	(カナダ) 側	内容 外国旅費	
	(連合王国) 側	内容 外国旅費	

8-3 研究者交流（共同研究、セミナー以外の交流）

所属・職名 派遣者名	派遣・受入先 (国・都市・機関)	派遣時期	用務・目的等
北海道大学・先住民研究センター・教授・加藤博文	カナダ・エドモントン・アルバータ大学	2013年9月	カナダ側との連絡調整
北海道大学アイヌ・先住民研究センター・加藤博文	連合王国・アバディーン・アバディーン大学およびオックスフォード・オックスフォード大学	2014年2月	連合王国側との次年度事業の打ち合わせおよび追加財源確保の準備
アルバータ大学・教授・Andrzej, WEBER	日本・札幌・北海道大学	2013年11月	1) 北海道大学との組織的共同関係の打ち合わせ（国際本部訪問）。2) 北海道大学における古代DNA分析機器の確認、および次年度の大学院生の資料分析目的での研究環境の確認

9. 平成25年度研究交流計画総人数・人日数

9-1 相手国との交流計画

派遣先 派遣	日本 〈人／人日〉	カナダ 〈人／人日〉	連合王国 〈人／人日〉	合計 〈人／人日〉
日本 〈人／人日〉		5/ 50 (0/ 0)	17/ 101 (4/ 40)	22/ 151 (4/ 40)
カナダ 〈人／人日〉	11/ 242 (20/ 600)		0/ 0 (6/ 30)	11/ 242 (26/ 630)
連合王国 〈人／人日〉	0/ 0 (8/ 128)	0/ 0 (0/ 0)		0/ 0 (8/ 128)
合計 〈人／人日〉	11/ 242 (28/ 728)	5/ 50 (0/ 0)	17/ 101 (10/ 70)	33/ 393 (38/ 798)

※各国別に、研究者交流・共同研究・セミナーにて交流する人数・人日数を記載してください。(なお、記入の仕方の詳細については「記入上の注意」を参考にしてください。)

※日本側予算によらない交流についても、カッコ書きで記入してください。(合計欄は()をのぞいた人数・人日数としてください。)

9-2 国内での交流計画

18/ 332 〈人／人日〉

10. 平成25年度経費使用見込み額

(単位 円)

	経費内訳	金額	備考
研究交流経費	国内旅費	5,900,000	国内旅費、外国旅費の合計は、研究交流経費の50%以上であること。
	外国旅費	7,500,000	
	謝金	0	
	備品・消耗品購入費	500,000	
	その他の経費	725,000	
	外国旅費・謝金等に係る消費税	375,000	
	計	15,000,000	研究交流経費配分額以内であること。
業務委託手数料		1,500,000	研究交流経費の10%を上限とし、必要な額であること。また、消費税額は内額とする。
合計		16,500,000	